

令和3年度 学校評価（自己評価）最終評価報告

石川県立小松高等学校

重点目標	具体的取組	主担当	実現状況の達成度判断基準	最終評価	分析（成果と課題）及び次年度の対応
<p>1 学びのある学校</p> <p>・学習習慣の確立に向けた指導や学力層・個に応じた学習指導により、上級学校進学のための学力を保障をする。</p> <p>・授業において「主体的、対話的で深い学び」を実現し、思考力・表現力やコミュニケーション能力の伸長を図る。また、課題研究等を通じて、主体的・協働的に課題を解決することができる探究力を育成する。</p> <p>・相互授業参観や研究授業の実施、各種研究会への参加など、研修・研究に積極的に取り組み、教職員の授業力及び人間力の向上を目指す。</p>	<p>① 予習を中心とする主体的な学びのサイクルを身につけさせるとともに、基礎力の定着及び応用力・活用力等の育成を図る。</p>	<p>教務課 各教科 各学年</p>	<p>予習を重視することにより、主体的に深く考えて学習する習慣が身につけていると自己評価する生徒の割合が全体の</p> <p>A 85%以上である B 80%以上である C 75%以上である D 75%未満である</p>	<p>後期学校評価結果</p> <p>予習を重視し主体的に深く考えて学習する習慣が身につけていると回答した生徒の割合</p> <p>86% (A)</p>	<p>予習を重視し主体的に深く考えて学習する習慣が身につけていると答えた生徒の割合は、昨年度よりも7ポイント増加した。予習を重視する習慣が着実に身につけてきていると考えられる。また、前期と比較しても84%から86%へと増加しており、生徒の意識が高まっていると考えられる。この傾向を維持できるような授業を今後も行っていく事が重要である。</p>
	<p>② 3学年にわたる学習体系を確立させ、課題研究を充実させるとともに、その取組を通じて生徒の探究力の伸長を図る。</p>	<p>S S H 各教科 各学年 教務課</p>	<p>すべての授業において、探究力が身についたと答える生徒の割合が</p> <p>A 75%以上である B 65%以上である C 55%以上である D 55%未満である</p>	<p>後期学校評価結果</p> <p>すべての授業において、探究力が身についたと答える生徒の割合が</p> <p>90% (A)</p>	<p>SSH3期目において、探究活動が理数科だけではなく普通科にも実施されることになり、全校体制が確立されてきた結果だと思われる。すべての教員が探究活動に関わっており、指導方法がすべての教科で確立されてきたことが結果につながったのではないかと。今後は粘り強く探究活動に取り組む指導体制を整えたい。併せて、粘り強く取り組む姿勢に対する評価方法の確立も行いたい。</p>
	<p>③ 生徒の具体的な活動を評価するパフォーマンス評価をさらに充実させ、学校設定科目や課題研究における探究活動でルーブリックを作成し、それをを用いた評価を行う。今年度は、ルーブリックを使用するタイミングを見直し、生徒が自身のフィードバックに有効に活用できるように改善する。</p>	<p>S S H 進路指導課 各教科 各学年</p>	<p>「ディベート大会」や「課題研究発表会」において、使用されたルーブリックが自身のフィードバックに有効に活用されたと考える生徒の割合が</p> <p>A 95%以上である B 90%以上である C 80%以上である D 80%未満である</p>	<p>年度末に調査する（アンケート形式）</p> <p>発表会において使用されたルーブリックが自身のフィードバックに有効に活用されたと考えた生徒の割合が</p> <p>98% (A)</p>	<p>「課題研究発表会」において、使用されたルーブリックが自身のフィードバックに有効に活用されたと考える生徒の割合は年々増加している（昨年度93%、一昨年度次84%）。生徒参加型ルーブリックとして、生徒たちにルーブリックの評価項目を考えさせ、お互いをルーブリックによって評価しあうことで、自身の活動にフィードバックすることができた。今後もルーブリックの評価項目について指導する本校教員と精査していきたい。</p>
	<p>④ 課題研究を通じて、生徒に主体的・協同的に課題を解決することができる探究力をつけさせる。</p>	<p>S S H 進路指導課 各教科 各学年</p>	<p>2年生、3年生の文系において、課題研究を通して探究力がついたと考える生徒が</p> <p>A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である</p>	<p>年度末に調査する（アンケート形式）</p> <p>2年生、3年生の文系において、課題研究を通して探究力がついたと考える生徒が</p> <p>76% (B)</p>	<p>昨年度に比べ約6ポイントの増加であった。人文科学コースではグループ決めをする際に生徒の第一希望をすべて優先した。7月に中間発表会、12月にプレ発表会、1月に最終発表会を行った。普通科文系では7月にテーマ発表会、11月に中間発表会を行いクラス内での意見交換を経て、2月に最終発表会を行った。外部有識者からの助言や、クラス内の意見交換は、生徒が探究を進めるに当たって有益であったと考えられる。</p>
	<p>⑤ 研究授業等を通して、教員自らが教科指導力を高め、授業の質的向上を図る。</p>	<p>教務課 各教科</p>	<p>アクティブ・ラーニングの手法を取り入れたり、ICT機器の活用を工夫することで、自らの授業を改善することができたと自己評価する教員の割合が</p> <p>A 75%以上である B 65%以上である C 55%以上である D 55%未満である</p>	<p>後期学校評価結果</p> <p>私はICTの活用を工夫することで授業改善につながった</p> <p>78% (A)</p> <p>私はアクティブラーニングの手法を積極的に取り入れている</p> <p>66% (B)</p>	<p>昨年度から新規の項目として入った内容である。前年度はコロナ禍でICTを用いた授業改善を行った教員が多く、比較的高い評価につながったと思われるが（前年度ICT活用で89%、ALで74%）、今年度は昨年度に比べて評価が下がった。これは、コロナが落ち着いてきた時期もあり、従来からの対面授業に戻った教員が多くなったためではないかと思われる。ただ、それぞれA評価、B評価は維持しているため、GIGAスクール構想と合わせて、ICT活用の取り組みを進めていきたい。</p>
<p>学校関係者評価委員会の評価</p>		<p>S S H事業が4期目を迎えることは、これまでの取組が評価された証であり、本県のリーダーとなるよう期待する。</p>			
<p>上記の評価結果を踏まえた今後の改善策</p>		<p>S S H事業の指定を生かし、今後とも高い学力と豊かな人間性を身につけ、国際社会に適用する人材の育成に努めていきたい。</p>			

令和3年度 学校評価（自己評価）最終評価報告

石川県立小松高等学校

重点目標	具体的取組	主担当	実現状況の達成度判断基準	最終評価	分析（成果と課題）及び次年度の対応
<p>2 個性が輝く学校</p> <p>・学習指導と進路指導の連携が取れ、3年間を見通した指導体制のもと、生徒に高い志を持たせ、一人一人の進路実現を図る。その際、低学年からのキャリア教育を充実させ、企業訪問や社会人による講演等を通じて、学ぶ意欲や進路意識の高揚を図る。</p> <p>・「文武両道」「自主自律」の精神のもと、学習活動のみならず部活動や学校行事、生徒会活動の充実を図り、豊かな人間性と社会性を育む。</p>	①	進路指導課 教務課 各学年 SSH	<p>難関10大学と国公立大学医学科の志望者数の合計が</p> <p>A 180人以上である B 150人以上である C 120人以上である D 120人未満である</p> <p>難関10大学と国公立大学医学科の合格者数の合計（現役生と過年度生の合計）が</p> <p>A 75人以上である B 65人以上である C 55人以上である D 55人未満である</p>	<p>合計 176名（B）</p> <p>難関10大学159人 国公立大医学科17人</p> <p>難関10大学と国公立大学 医学科の合格者数 合計60人（C）</p> <p>難関10大学 56人 国公立大医学科 5人 （重複1名あり）</p>	<p>学年を中心とした働きかけがあり、難関10大学と国公立大学医学科の志望者数は、昨年度2年生より更に増加した。（昨年度150名）。学習内容の深化とともに自己の学習成績とのギャップから、9月から2月にかけて志望を下げる傾向は例年通りである。進路行事の創意工夫、今年度の受験結果等の情報をもとに、生徒に高い志を持たせ、志望を継続させていく。</p> <p>厳しい受験結果が予想された現役生であったが、果敢に挑戦した結果、難関10大学は、47名の合格であった。例年に比べ、浪人生が少ないため、浪人生の難関大学合格者は7名に留まった。高い志望を抱く生徒は増えてきたが、志望と進路を如何に合致させるかがこれからの課題である。</p>
	②	生徒指導課	<p>生徒の服装・挨拶などの生活指導が適切であると考える保護者の割合が</p> <p>A 95%以上である B 90%以上である C 80%以上である D 80%未満である</p>	<p>後期学校評価結果</p> <p>生徒の服装・挨拶などの生活指導が適切であると考える保護者の割合が</p> <p>91%（B）</p>	<p>生徒指導が適切であるとする保護者の割合が前期と比べて3ポイント減少した。より適格な指導が求められる。生徒の生活状況を見ながら、落ち着いた学習環境を維持していくために、効果ある指導に努めていきたい。</p>
	③	生徒指導課 教育相談室 各学年	<p>みんなで何かをするのは楽しいと考える生徒の割合が</p> <p>A 95%以上である B 90%以上である C 80%以上である D 80%未満である</p>	<p>後期学校評価結果</p> <p>みんなで何かをするのは楽しいと考える生徒の割合が</p> <p>97%（A）</p>	<p>みんなで何かをするのが楽しいと回答する生徒の割合は前回と同様高い水準ではあるが、否定的にとらえている生徒がいることの現実も十分踏まえ、いじめの兆候を見逃すことなく、関係機関と連携して組織的な対応を心掛けていきたい。</p>
	④	生徒会課 部同好会顧問	<p>部活動が人間力の向上(学業との両立、挨拶など)につながったと考える（評価1）生徒の割合</p> <p>A 60%以上である B 50%以上である C 40%以上である D 40%未満である</p>	<p>後期学校評価結果</p> <p>部活動が人間力の向上(学業との両立、挨拶など)につながったと考える生徒の割合</p> <p>55%（B）</p>	<p>コロナ禍前の2019年度は57%、コロナ禍で大会等が中止となった2020年度は55%と2ポイント減じたが、今年度は昨年度同程度であった。この要因は、生徒一人一人が自信を持って行動することができていないことが考えられる。部活の大会成績も総合15位、男子は10位を近年維持しているが、女子は20位と下降の一途をたどっている。今年度は挨拶推進月間と銘打ち自己肯定感を高める取り組みを始めた。今後も継続し、克己心を育てていきたい。</p>
	⑤	保健環境課	<p>環境美化意識を持って行動している生徒の割合が</p> <p>A 95%以上である B 90%以上である C 85%以上である D 85%未満である</p>	<p>学校評価結果</p> <p>環境美化意識を持って行動している生徒の割合</p> <p>94%（B）</p>	<p>前期後期共に94%であった。達成度は、ほぼAに近いが、今後も継続して、環境美化意識を持った生徒の育成に取り組んでいきたい。</p>

令和3年度 学校評価（自己評価）最終評価報告

石川県立小松高等学校

重点目標	具体的取組	主担当	実現状況の達成度判断基準	最終評価	分析（成果と課題）及び次年度の対応
2	⑥ 教科・学年および図書委員会と連携し、生徒の図書室利用を促進する。また、読書への関心を高め、知的好奇心を喚起することに努めることで、総貸出冊数を増加させる。	図書室 各教科 各学年	1年間の総貸出冊数が A 3,500冊以上である B 3,000冊以上である C 2,500冊以上である D 2,500冊未満である	1月7日現在の 総貸出冊数 2,166冊（D）	総貸出冊数は年々減少している。今年も朝読書を実施できなかった学年があるため、その影響も多少ある。来室生徒数も12月末時点で5,622人と大幅に減少しており（例年は3月末までで約7,000～10,000人来室）、企画や案内の仕方を検討する必要がある。今後は、図書委員によるポップや本の百人一首、紙上ビブリオバトル展示などの活動を継続しつつ、学年や教科とも積極的に連携して読書活動の推進に取り組む。また、本校が以前に取り組んでいた新書に触れる機会を設定することも視野に入れる。
	⑦ 体育の授業を通じて、体力向上の大切さを理解させ、筋力・走力と、体力の源である持久力アップのための取組を行う。	保健体育科 各学年	持久走（男子1500m走、女子1000m走）の記録を春と秋と比較し、向上した生徒の割合が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である	持久走の記録を春と秋と比較し、向上した生徒の割合が 68%（C）	全体では68%の生徒が記録を向上させた。学年間、男女間では、1年男子は85%（A）、1年女子と2年男子、3年女子が70%以上（B）だった。特に3年女子は部活動終了後だが、例年以上の向上を見せた。逆に、2年女子が58%、3年男子が51%と低い数値となった。例年、3年生の向上の割合は低いが、2年女子が低い数値となったことは憂慮すべきである。目標や物事に対して全力で取り組む雰囲気が結果を左右する。全力で取り組むことが本校の強みになるよう体育科でも注視していく。
学校関係者評価委員会の評価		挨拶や環境美化についてはしっかりしている。最近、子どもにもメンタル面での不調を訴えるケースがあると聞く。メンタル面のケアも大切にしていきたい。			
上記の評価結果を踏まえた今後の改善策		教育相談室を中心に、職員間で情報共有するとともに、スクールカウンセラーなどの専門家とも連携し、適切な対応に努めていきたい。			

3 地域から信頼される学校 ・学校公開やホームページ等を通じて本校の教育活動を積極的に情報発信し、保護者や地域から信頼される「開かれた学校づくり」を推進する。 ・地域でのボランティア活動を推進するとともに、異校種間の連携を密にし、南加賀地区の基幹校としての自覚ある学校運営に努める。	① 主な学校行事や特色ある教育活動等について、生徒・保護者・地域から求められる情報を、ホームページやPTA活動等を通じて発信する。	総務課 教務課	学校は開かれた学校づくりに積極的に取り組んでいると考える保護者の割合が A 95%以上である B 90%以上である C 85%以上である D 85%未満である	後期学校評価結果 学校は開かれた学校づくりに積極的に取り組んでいると考える保護者の割合が 87%（C）	今年度もコロナ禍で、PTA活動において総会・支部総会が中止になったが、学年別懇談会を分散開催し、多くの保護者が参加した。学校評価結果は、前期93%（B）であったが、後期87%（C）となった。今後も、保護者のニーズに応えられるよう代替行事を企画立案し、また各課・室・学年が協力し、メール配信やホームページの更新などの情報発信に努めていきたい。
	② 部・同好会活動が、各々の特性や得意な分野を活かすなど、地域等のボランティア活動に年間最低1回は参加する。	生徒会課 部同好会顧問	ボランティア活動に参加した部・同好会活動の数が全体の A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	ボランティア活動に参加した部・同好会活動の割合 100%（A）	全ての部・同好会が10月から12月を中心に、校地内外でさまざまなボランティア活動を実施した。依然続くコロナ禍においては、かつて実施していた外部との交流をとおしたボランティア活動が難しい状況にあるが、次年度以降も奉仕の心を育むための機会を創出できるよう引き続き働きかけていきたい。
学校関係者評価委員会の評価		生徒や保護者のなかには、SSH事業やNSH事業について理解していない方が多い。広報活動を工夫する必要がある。			
上記の評価結果を踏まえた今後の改善策		全校生徒に理解してもらえるよう、校内で広報スペースを設けるなど取り組んでいきたい。			

令和3年度 学校評価（自己評価）最終評価報告

石川県立小松高等学校

重点目標	具体的取組	主担当	実現状況の達成度判断基準	最終評価	分析（成果と課題）及び次年度の対応
4 「働き方改革」に沿った職場づくり ・教職員の協働する力を大切に し、教育的効果との相関を考慮し つつ校務の精選・効率化を進め る。 ・各自がワーク・ライフ・ balan スやタイムマネジメントを意識し て業務を進め、時間外勤務時間の 縮減に努める。	① 教育的効果を考慮しつつ、行 事・業務の整理を行う。	副校長	行事・業務の整理・統合・精選により、校務の効率 化が図られたと考える教職員の割合が A 60%以上である B 50%以上である C 40%以上である D 40%未満である	後期学校評価結果 行事・業務の整理・統合・ 精選により、校務の効率 化が図られたと考える教 職員の割合が 68% (A)	昨年度同期より12ポイントの増加となった。昨年度は新型 コロナ感染症への対応が求められ、今まで経験のない新し い仕事が必要となり多忙感が見られた。今年度も新型コロ ナ感染症への対応は必要であるが、昨年度の経験が活かさ れていることで、身の回りの業務の改善に努めることが出 来た。今後も行事・業務の必要性を考え、校務の効率化の 推進を図っていきたい。
	② 月2回の定時退校日、部活動の 休養日等を設定し、さらに業務 遂行の効率化を進める。	教頭	時間外勤務が80時間を超える教職員の割合が A 10%未満である B 15%未満である C 20%未満である D 20%以上である	教職員勤務時間調査結果 時間外勤務が80時間を超 える教職員の割合が 13% (B)	昨年度は臨時休業期間があり8%であったが、一昨年度と の比較では5ポイント低くなっている。時間外勤務時 間の縮減は進んでいると言える。80時間超の主な原因は、 部活動等の休日における教育活動である。今後は、特定 の教員に過重な業務負担がかからないように、校務のさらな る効率化、平準化を図りたい。
学校関係者評価委員会の評価		新型コロナウイルス感染症への対応で、多忙感が増したのではないかと。引き続き業務の効率化に努めてもらいたい。			
上記の評価結果を踏まえた今後の改善策		スクールサポートスタッフが配置され消毒作業等を担ってもらっている。今後とも、教育的効果を大切にしながら業務の効率化に努めていき たい。			